

幻の伊勢物語屏風

—林原美術館蔵「池田綱政筆伊勢物語屏風メクリ四十二枚」をめぐって—

山本 登朗とくろう

一 現状

「池田綱政筆伊勢物語屏風メクリ四十二枚」は、林原美術館に所蔵される岡山池田家伝来資料の一点（書跡二八四―一）である。本来は伊勢物語屏風の一部であったと思われる紙片が四十二枚、一括して包み紙に包まれて現存している。その包み紙（包みの大きさ、縦三七・五センチ×横二四・五センチ）には、中央に「綱政公御筆 伊勢物語御屏風メクリ 歌 大小切々 四十二枚」と記されていて、この「屏風メクリ」が、岡山池田藩第二代の藩主、池田綱政（寛永十五年・一六三九―正徳四年・一七一四）の筆蹟として、屏風から切り取られ大切に保存されてきたことが知られる。包み紙にはこの他、「故御廟御宝庫」や「色一号二ノ二 内十三」（朱筆）など、この資料のかつて

の保管や分類に関わると思われる文字が記されている（写真①参照）。

包み紙の中には、標示通り四十二枚の紙片が重なった形で収められている。その大きさは小さく、最大のものは後述する第二二段の和歌が書かれたもので縦二三・三センチ×横三十五・四センチ、最小は縦一三センチ×横一八センチである。そこに記された、綱政の筆蹟と考えられる文字は、包



写真①

み紙に書かれているようにほとんどが伊勢物語の和歌だが、一首だけでなく一つの紙片に二首の歌が書かれたものもあり、さらには後述するように、和歌以外の物語本文が書かれたものも含まれている。多くの紙片の周囲には絵の一部が見えており、中にはかなり大きく絵が残されているものもあって、もとの屏風（以下「原屏風」と呼ぶ）が伊勢物語の絵を描いた屏風であったことが知られる。さらに、文字がすべて金地の雲形の中に書かれていることから、伊勢物語屏風の画中の金地雲形部分に、和歌を中心とする物語本文が書き加えられたものであったことが知られるのである。

二 屏風原型の推測・その一

伊勢物語屏風の画中の金地雲形部分に和歌などが書かれている現存例は多くないが、伊藤敏子氏『伊勢物語絵』（一九八四・角川書店）に紹介されているニューヨーク・メトロポリタン美術館所蔵バークコレクションの伊勢物語屏風六曲一双に、原屏風と類似した、金地雲形に和歌を書き入れた類例が見られる（河田昌之氏の御示教による、写真②③参照）。原屏風における絵と文字のかかわりの形も、これとほぼ同様であった



写真② メトロポリタン美術館屏風1



写真③ メトロポリタン美術館屏風2

と推測される。

しかし、このメトロポリタン美術館所蔵の屏風は小型のものであり、描かれている場面数も十七場面と少なく、記された和歌もわずか十七首であって、「池田綱政筆伊勢物語屏風メクリ四十二枚」に見える四十二首以上の和歌の数と比べて、きわめて少ない。その点、両者の性格はかなり異なっているとわざわざを得ない。また、これとは別に、伊藤敏子氏同書には、第三段・第五一段の二場面が描かれ、その両章段の本文が画面上部の金

地雲形部分に書かれている二曲一双の屏風も紹介されているが、これは二章段のみが描かれたものであって、これもまた、原屏風の姿とは、かなり形態が異なっていると言わねばならない。

三 屏風原型の推測・その二

「メクリ四十二枚」の各紙片には、一枚に二章段の和歌が書かれているものも含まれているが、その場合、原屏風ではその近くに二章段それぞれの場面の絵が描かれていたと考えられる。四十二枚という紙片の枚数は、原屏風に描かれていた場面の数とは、かならずしも一致しない。いま、原屏風に描かれていた絵画場面とその数を確認するために、「池田綱政筆伊勢物語屏風メクリ四十二枚」に和歌などが記されている章段(場面)を、定家本伊勢物語の配列に従って章段番号順に列挙すると、次の通りである。(同一章段の複数の場面の和歌が異なった紙片に別々に記されている場合には、章段番号の下に a b c … の記号を付して別場面として列挙する。)

- 一、二、三、四、五、六、七、八、九 a、九 b、九 c、九 d、
- 一、二、一四、一八、二〇、二二、二三 a、二三 b、二三 c、
- 二四、二七、二九、四一、四五、四九、五〇、五一、六〇、六三、六

- 五、六八、六九、七一、七八、八〇、八一、八二、八三、八七 a、
- 八七 b、九三、九五、九八、一〇一、一〇六、一一九

以上によれば、原屏風には合計四十一章段・四十七場面の絵が描かれていたと考えられるが、ここに列挙された章段と場面は、伊勢物語最初の版本として慶長十三年(一六〇八)に刊行された嵯峨本伊勢物語の挿絵の場面と、ほぼ一致しており、第六七段と第一二五段が含まれていない点が異なるのみである。このうち第一二五段は臨終の段であり、不吉を嫌って意図的に避けられることも多かったと思われる。第六七段の歌が見えない点については、あるいは本来四十三枚あった紙片のうち、第六七段の和歌を書いた一枚が脱落したかとも考えられるが、いまはひとまずこの段が省略されて描かれなかったものと考えておく。すなわち原屏風は、嵯峨本伊勢物語に描かれた挿絵の四十九場面をそのまま踏襲しつつ、そのうち臨終の段である第一二五段を割愛し、それに加えて第六七段も省略して、合計四十七の場面を描いたものだったと考えられるのである。

伊勢物語嵯峨本の挿絵が、江戸時代前期の伊勢物語絵に対して実に大きな影響を及ぼしていたことはよく知られた事実である。宗達や岩佐又兵衛など一部の絵師の作を除けば、元禄ごろまでの伊勢物語絵入り版本や手描きの絵が添えられた伊勢物語

絵本のほとんどすべての挿絵は、嵯峨本で描かれた章段の同じ場面を踏襲して描いており、構図や図柄についても、若干の変化を加えつつも、嵯峨本とほぼ同じように描かれたものがほほすべてであると言ってよい。その事情は、伊勢物語屏風についても同様であったと思われる。原屏風は、嵯峨本で挿絵として描かれた四十九の場面のうち四十七の場面を、おそらくは嵯峨本の流れをくむ類似の構図を用いて描いたものであったと考えられるのである。

四 類例との比較：国文学研究資料館蔵鉄心斎文庫伊勢物語図屏風

原屏風の姿についてさらに考えるために、同じように嵯峨本の影響を受けている、国文学研究資料館蔵の鉄心斎文庫伊勢物語図屏風を取り上げてみたい（この屏風については、『鉄心斎文庫所蔵吉澤新二コレクション展Ⅵ・「伊勢物語図屏風」の世界』〔二〇〇四年・鉄心斎文庫伊勢物語文華館〕、国文学研究資料館特別展示図録『伊勢物語のかがやき―鉄心斎文庫の世界―』〔二〇一七年・人間文化研究機構国文学研究資料館〕を参照。
<https://doi.org/10.20730/200025220> で画像が公開されている。



写真④ 鉄心斎文庫屏風 1



写真⑤ 鉄心斎文庫屏風 2

なお、嵯峨本伊勢物語の影響を受けた同類の作品として、他に斎宮歴史博物館所蔵の伊勢物語図屏風が知られている。

国文学研究資料館蔵の鉄心斎文庫伊勢物語図屏風（写真④⑤参照）は六曲一双。紙本着色。全体の大きさは各縦一七〇センチ×横三六八センチ。絵の部分は各縦一五六センチ×横三五六センチ。金地の大きな雲形が場面の区切りとして多用されている、そこには特に文字は書かれていないが、書こうと思えばそのために十分な大きさがあるように見える。いま仮に概算して

みると、鉄心斎文庫伊勢物語図屏風の左隻・右隻の画面を合わせた総面積は一一〇七二平方センチだが、「池田綱政筆伊勢物語屏風メクリ四十二枚」のすべての紙片の面積を合計すると一四七三〇平方センチ。双方の屏風の大きさが同じであったと考えると、金地雲形に文字が書かれた四十二枚の部分の面積は、全体の一三・三パーセントを占めていたことになる。

この鉄心斎文庫伊勢物語図屏風に描かれている場面は四十四場面（うち第六〇段の絵には疑問があるが、前述の『伊勢物語』のかがやき―鉄心斎文庫の世界―に従っておく）。それを嵯峨本と比べると、ここでも第一二五段は描かれておらず、その他、第二段、第三段c（高安）、第二段、第四段、第一段の四場面が、鉄心斎文庫伊勢物語図屏風には描かれていない。描かれた場面だけから比較すると、四十七場面を描いていたと思われる原屏風の方が嵯峨本により忠実であり、鉄心斎文庫伊勢物語図屏風の方が嵯峨本からやや新しい形に踏み出そうとしているように見える。

五 絵の検討

「メクリ四十二枚」には、原屏風の絵のかなりの部分が紙片

の中に文字とともに残っている場合がいくつか見られる。それらを見ながら、原屏風の原型についてさらに考えてみたい。

まず、第六段の「白玉か」の歌が書かれた紙片には、その右下に、第六段の、芥川の河辺を逃げる男女の姿を描いた絵の一部が見える（写真⑥⑦）。男が振り返って、背負っている女と同じ方向を見ている、その視線の先には、白く輝く露が描かれていたはずである。この図柄は嵯峨本（写真⑧）に



写真⑥ 6段



写真⑦ 6段拡大



写真⑧ 嵯峨本6段



写真⑩ 27段



写真⑨ 鉄心齋文庫屏風6段



写真⑪ 嵯峨本27段

見られるもので、さらには鉄心齋文庫伊勢物語図屏風(写真⑨)にも共通して見られ、原屏風や鉄心齋文庫伊勢物語図屏風が嵯峨本の絵を(間接的に)継承しているひとつの徴証と言うことができる。

次に、第二七段の歌が書かれた紙片の左側には、女の歌を立ち聞きする男の姿の絵が残され

ている(写真⑩)。体

をそむける

ようなこの

姿勢も、嵯

峨本の絵

(写真⑪)

とよく共通してい

る。この場面の場合、

鉄心齋文庫伊勢物語

図屏風では男は立ち

聞きではなくのぞき

見(かいまみ)をし

ているような姿勢で

描かれていて、嵯峨本の図柄から離れた形になっている。

第一四段の歌が書かれた紙片には、陸奥の女と思われる女性の姿が鮮明に残されている(写真⑫)。この絵は、嵯峨本(写真⑬)の、後ろを向いた女性の像とは異なっている一方、鉄心齋文庫伊勢物語図屏風(写真⑭)とは左右逆転しているがよく似た図様となっている注目される。



写真⑬ 嵯峨本14段



写真⑫ 14段



写真⑭ 鉄心斎文庫屏風 14 段



写真⑮ 22 段



写真⑯ 41 段

第二三段の場合、紙片の左側に「秋の夜の千夜を一夜になぞらへて」の歌が通常の形で書かれ、その右側に、左から右に向けて逆方向に改行しつつ「秋の夜の千夜を一夜になせりとも」という返歌が書かれている（写真⑮）。工夫を凝らした書法の一例がここにも見られるのだが、この紙片にはこの段の絵がほとんど完全な形で残されている。構図は変わっているが、この絵も嵯峨本の系統を引くものと考えられる。ちなみに前述したように、この紙片は、残された四十二枚のうち最大のものである。この段の絵は、鉄心斎文庫伊勢物語語図屏風には描かれていない。

第四一段の場

合は「紫の色こき時は」という歌の後に「むさし野の心なるべし」とい

う本文の詞章が書かれ、その下に絵の一部が残されている（写真⑯）。この絵も、左右逆転しているが嵯峨本第四一段の絵（写真⑰）に近い姿であることが、残存部分からうかがわれる。

第二三段と第二〇段の歌が記されている紙片（写真⑱）には、上と下に絵が見える。下部に見えるのは第二〇段の絵のほぼす



写真⑱ 23 段、20 段



写真⑰ 嵯峨本 41 段



写真⑱ 絵入り伊勢物語 12段



写真⑳ 49段

べてと思われるが、上部右側に見える武装した男たちの絵は、第二三段ではなく、第一二段の、武蔵野に隠れている男女を捕らえようとする者たちを描いた絵と考えられる。この中の、左側で弓を引いている男は江戸時代風の武士の姿をしていて、その鎧の胴には丸に「大」という文字を書いた紋が大きく記されている。鉄心斎文庫旧蔵絵入り伊勢物語のうち、『絵で読む伊勢物語』（山本登朗・二〇一六年・和泉書院）に絵を掲載した一本でも、同じ段の絵の同じ人物の鎧の胴に、この同じ、丸に大の字の紋が見られ、また構図全体も、左右逆転してはいるがほぼ同じである（写真⑲）。原屏風は嵯峨本に比較的近い姿を保っていると考えられるが、その一方で、嵯峨本から変化した、

江戸時代の絵入り伊勢物語の新しい構図や図柄が、このように用いられているものもあるのである。

また、第四九段（写真⑳）と第五一段は、伊勢物語の全文が書き記されている。金地部分のスペースなどを見計らって、文字の大きさも変えながら、さまざまな形に自由に文字を書いている筆者池田綱政の姿が、これら「メクリ四十二枚」からはうかがわれる。

林原美術館所蔵の池田家資料には、書とともに絵にも造詣の深かった綱政が絵師たちとともに作成したと思われる書画一体の作品が多く残されているが、この「メクリ四十二枚」が痕跡を伝えている原屏風もまた、そのような作例の一つではなかったかと考えられるのである。

原屏風の絵がほとんど残されていないことはきわめて残念だが、時代の変遷とともに数多くの伊勢物語屏風が消えていった中であって、藩主の筆蹟としてこのような形で大切に保管されたからこそ、この幻の伊勢物語屏風はその存在の痕跡を現在にまで伝えることができた。そして、筆者が池田綱政（寛永十五年・一六三九〜正徳四年・一七一四）に特定されていることによつて、我々は、現存する伊勢物語屏風の中でもっとも嵯峨本に近い姿を持っていたと思われるこの原屏風の成立時期を、確実

に想定することができるのである。

〈付記〉

本稿は、二〇一七年度～二〇一八年度関西大学教育研究緊急支援経費を受けて行った共同研究「林原美術館所蔵資料の総合的調査―岡山池田藩藩主の文事と岡山の文化を探る―」（代表・山本登朗）、および二〇一九年度～二〇二一年度関西大学教育研究高度化促進費を受けて行われている「林原美術館所蔵資料の総合的調査―林原美術館との連携強化のために―」（代表・乾善彦）の成果の一つである。調査研究にあたって、貴重な資料の閲覧および撮影をお許しいただいた林原美術館の御厚情に心より御礼申し上げます。

（やまもと とくろう／本学名誉教授）